木曽定勝寺蔵大般若経音義について

山　田　健　三
（信州大学人文学部）

1　はじめに

本稿は、定勝寺（長野県木曽郡大桑村須原）に伝わる、明応４年～５年［1495―1496］書写奥書を持つ大般若経音義（重誉音義）の紹介と、現在までに調査しえた点の報告である。大般若経音義は日本語史資料としてもよく知られているものであるが、この定勝寺本はこれまで紹介されていないものである。

2　大般若経音義について

玄奘訳大般若波羅蜜多経の音義書は古くから種々作られているが、邦人の編にかかる著名なものに次のものがある。

1．信行音義（元興寺信行撰）：『大般若経音義』
2．真興音義（興福寺真興［934―1004］撰）：『大般若経音訓』
3．公任音義（藤原公任［966―1041］撰）：『大般若経字抄』
4．重誉音義（光明山重誉［保延頃］撰）：『大般若経音義』

この内、中世に広く流布したものが４の重誉音義である。本稿で紹介する、定勝寺に伝わる大般若経音義も、重誉音義の一本である。

ちなみに定勝寺本は題簽では「大般若音訓」、内題では「大般若経（之）音義」と異なる書名であるが、本稿では通例に従って「大般若経音義」と呼称する。

3　重誉音義について

3.1　撰者重誉について

この音義書の撰者は重誉（ちょうよ）と推定されている。

重誉音義と見られている諸本（後述）にその名は見えないが、夙に築島裕（1960）が指摘したように、心覚撰『鵝珠鈔』[1] 巻末には「大般若經［光明山重譽撰］」の標題のもとに抄出された大般若経音義からの抜書きと思われる逸文が存するが、内容的によく一致を見せる。

重誉は、平安後期の僧で生没年は未詳であるが、東大寺東南院の覚樹に三論を学び、静誉に小野流の密教を受ける。杜交を嫌い、山城光明山寺に住し浄土教を信奉したという[2]。一方、心覚も、平安後期[3] の学僧で、真言宗常喜院流の祖とされ、多くの著作を残しているが、光明山で25年に及

1　『真言宗全書・第三十六』所収。
2　『日本仏教人名辞典』法蔵館。

ぶ修行を行っており[4]、両者は「光明山」で繋がりを見せる。

ちなみに重誉音義諸本の内、書写年代が判る最古写本は弘安9年［1286］7月の識語を持つ薬師寺本（甲本）、同年10月書写識語の天理本であり、また、無窮会神習文庫蔵本は、年代は不明ながらおそらく鎌倉初期の書写で、最古のものと考えられており[5]、本音義の著者を重誉に比定することに、時期的な矛盾はない。

3.2　重誉音義諸本について

重誉音義は、中世に写本でよく流布したようであり、テクスト諸本には、鎌倉期写本と見られる上記の無窮会神習文庫本、薬師寺本（甲本）、天理本の他に、室町期の写本として大東急記念文庫本（一帖）、真福寺本（巻上下）、仏乗院本（巻上一）、六地蔵寺本（巻中一帖）などが知られている（表4参照）。

明確な書写年代が不明なものが多く、完本が少ない中で、この定勝寺本は、明応4年～5年［1495―1496］書写という年代が明確な室町期写本であり、一部欠損はあるもののほぼ完本のものとして貴重である。

4　定勝寺本

音義本文の冒頭部（第一帖）、判型および題簽（第二帖）、奥書（第五帖）の写真を本稿最後に掲げておく。（図1、2、3参照）

4.1　書誌情報

定勝寺本大般若経音義は、折本五帖仕立。サイズは、全帖ほぼ縦26.0×横10.5cm（図2参照）。料紙は楮紙（厚様と薄様とを混用）。第三帖表紙と第一紙分が剝がれ紛失している他は完存である[6]。

次に各帖ごとの書誌データを掲載する。

1．【第一帖】

(a)　紙　数：13紙

(b)　一紙幅：40.3cm

(c)　折　数：23折

(d)　判　型：縦26cm×横10.5cm

(e)　貼題簽：「□□若音訓初百□□□」

(f)　内　題：「大般若經音義　定勝寺常住」

(g)　目　次：

---

[3] 永久5［1117］～治承4［1180］〔養和2［1182］？〕。

[4] 斎藤昭俊・成瀬良徳編著（1993）『日本仏教人名辞典』新人物往来社、p.236

[5] 築島（1977：15）では「旧稿で私は「鎌倉中期の写本」としたけれども（中略）、鎌倉初期まで遡らせて考へてもよいのではないかと考へるに至つた」「少なくとも天理本の鎌倉中期弘安9年（1286）よりも新しいとは到底考へられない」とする。

[6] 2004年11月の調査現在では、この欠損部は見つかっていないが、見つかる可能性はまだ充分残っていると思われる。

「初百内一之帙　初百内二之帙
初百内四之帙　初百内五之帙
初百内六之帙　初百内九之帙
初百内十之帙

(h) 本文見出：
「第一之帙」「第二之帙」「第四帙」「第五帙」「第六帙」「第八帙」[7]「第九帙」「第十帙」

(i) 奥　書：
「定勝寺常住
明應第四〔乙卯〕七月廿日　任本書寫畢筆者心傳叟祖正」

2．【第二帖】

(a) 紙　数：6紙
(b) 一紙幅：40.3cm
(c) 折　数：10折
(d) 判　型：縦26.6cm×横10.5cm
(e) 貼題簽：「大般若音訓二百内三百内之分〔在虫〕」（ハガレ）
(f) 内　題：「大般若経之音義　定勝寺常住」
(g) 目　次：
「二百内一之帙　二百内三之秩
二百内七之秩　二百内八之帙
二百内九之帙　并三百内十之袤」

(h) 本文見出：
「第一之帙」「第三之袤」「第七帙」「第八之袤」「第九之秩」「三百内十之秩」

(i) 奥　書：
「定勝寺常住
明應第四〔乙卯〕七月廿二日　任本書寫畢筆者心傳叟祖正記」

3．【第三帖】

(a) 紙　数：17紙（第1紙欠のため、推定）
(b) 一紙幅：40.3cm
(c) 折　数：31折（第1紙欠のため、推定）
(d) 判　型：縦26.0cm×横10.5cm
(e) 貼題簽：（表紙欠）
(f) 内　題：（第1紙欠のため、不明）
(g) 目　次：（第1紙欠のため、不明）
(h) 本文見出：
（第一之帙）「第二之袤」「第三之袤」「第四之袤」「第五之帙」「第六之袤」「第七之帙」「第八之袤」「第九之秩」「第十之帙」

(i) 奥　書：

[7] 「初百内八之帙」は現れないが、実際の本文にはある。

「定勝寺常住
明應第四〔乙卯〕八月廿九日　心傳叟祖正筆」

4．【第四帖】

(a) 紙　数：26紙
(b) 一紙幅：40.8cm
(c) 折　数：47折
(d) 判　型：縦26.0cm×横10.5cm
(e) 貼題簽：欠
(f) 内　題：「大般若経之音義　定勝寺常住」
(g) 目　次：
「五百内一之帙　五百内二之帙
五百内三之秩　五百内四之秩
五百内五之帙　五百内六虫袠
五百内七之秩　五百内八之帙
五百内九之帙　五百内十虫秩」
(h) 本文見出：
「第一之秩」「第二之秩」「第三之帙」「第四之秩」「第五虫袠」「第六之帙」「第七虫袠」「第八之袠」「第九之秩」「第十之帙」
(i) 奥　書：
「定勝寺常住
明應四年〔乙卯〕霜月八日書之　心傳叟祖正任本書之」

5．【第五帖】

(a) 紙　数：34紙
(b) 一紙幅：40.2cm
(c) 折　数：65折
(d) 判　型：縦26cm×横10.5cm
(e) 貼題簽：「大般若音訓六百内之分」
(f) 内　題：「大般若經音義　定勝寺常住」
(g) 目　次：
「六百内一之帙　六百内二之秩
六百内三之秩　六百内四之袠
六百内五之帙　六百内六之秩
六百内七之帙　六百内八之袠
六百内九之秩　六百内十之帙」
(h) 本文見出：
「第一虫秩」「第二之秩」「第三秩」「第四之帙」「第五之秩」「第六之袠」「第七之帙」「第八之帙」「第九之帙」「第十之秩」
(i) 奥　書：

「大般若経音義之終　定勝寺常住
奉寄進木曾須原淨戒山定勝禪寺常住芒
右此音義從昔以来無當方間為末代
書一本可置情旨而雖求不得本彼草本
濃州惠那郡遠山庄明智郷之内於窪原山
藥師寺借得是間雖為悪筆任本如形書
寫畢　筆者祖正愚昧也本書亦俗字也仍
文字訛謬點畫之誤不可勝計他見之嘲哢
其憚不少　伏冀後見之智者可被加直笔
者也　願以此功徳普及於一切我等与衆生皆共成佛道
于旹明應五年〔丙辰〕閏二月十六日心傳叟祖正〔行年七十一㞍〕書」

4.2　書写時期・書写者などについて

書写奥書によれば、書写時期および書写量は表１の通り[8]。

表１：書写時期

書写時期		書写量（墨付頁）	１日あたりの書写量
～明応４年７月20日	第一帖	48ペ（墨付46ペ）	?
～明応４年７月22日	第二帖	22ペ（墨付20ペ）	20/2＝10
～明応４年８月29日	第三帖	64ペ（墨付62ペ）	62/38＝1.6
～明応４年11月８日	第四帖	96ペ（墨付94ペ）	94/71＝1.3
～明応５年２月16日	第五帖	132ペ（墨付130ペ）	132/100＝1.3

書写は、第一帖から順に行われている。今、書写畢日を手掛かりに帖毎に一日あたりの書写量を算出してみると、第三帖～六帖は、ほぼ一日あたり１～２頁分の書写になるが、第二帖については10頁分を写しており、突出して多い。この差についての安易な解釈は慎むべきではあるが、第二帖自体の量の少なさや、また本音義の書写活動初期であることが関与していようか。全て筆は同筆と考えられ、書写者の違いを反映している可能性はない。

書写者は、第五帖奥書に「雖為悪筆任本如形書寫畢。筆者祖正愚昧也。本書亦俗字也。仍文字訛謬點畫之誤不可勝計。他見之嘲哢其憚不少。伏冀後見之智者可被加直笔者也」と記すが如く、本文、題簽とも全て「心傳叟祖正」による一筆とみられる。別人の筆、後筆・補筆は見えない。但し各帖内題に見える「定勝寺常住」は明らかに墨の濃淡が前後と異なり、後に書き加えられたと見得るが、筆は同一人物のものと見られる。

書写者「心傳叟祖正」については未勘。現在知られている歴代住職名には見られない（cf.浄戒山定勝禅寺（1998））。定勝寺蔵の大般若経（刷本）の表紙直題簽の筆（図４参照）は、この「心傳叟祖正」と同筆である。また、定勝寺に伝わる、延徳三年［1491］書写の逆修文書の筆も、同一人物と見られる[9]。ちなみにこの「心傳叟祖正」を固有名と見てよいかどうかも不明である。後に触れ

[8] 第三帖は表紙と第一紙分が欠落しているが、他帖から推定し補った書写量で示している。

る林昌寺文書『醫王山林昌寺由来記』の書写者は「林昌寺隠居　祖的叟書」（下線山田）と記しているが、この「祖的叟」はその字面からして、おそらく固有名ではないであろう。「心傳叟祖正」も固有名ではなく、現役住職を退いた「隠居」程度の意味なのかも知れない。

4.3　書写の経緯

書写の経緯については、第五帖奥書に次のようにある。

> 右此音義從昔以来無當方間為末代書一本可置。情吉而雖求不得本。
> 彼草本濃州惠那郡遠山庄明智郷之内於窪原山藥師寺借得。…

この奥書によれば、当時この音義が定勝寺にはなかったので、末代の為に「濃州恵那郡遠山庄明智郷内」の「窪原山薬師寺」にあった一本を借り、書写したということになる。

4.4　窪原山薬師寺について

定勝寺本の書写底本を有していた「窪原山薬師寺」を、現在のどの寺院に比定すべきかについては、結論から言えば、不明といわざるを得ない。ここでは、今後の調査研究の進展を期して、不充分であることは重々承知の上で、いくらか調査し得た結果に基づく考察過程を提出しておくにとどめる。

奥書にいう「濃州恵那郡遠山庄明智郷」は現在の岐阜県明智町・山岡町・串原村・上矢作町[10]あたりかと思われるが、現在、当該地域に存在する寺院は全て江戸期以降のものばかりである。

同地において「宝珠山薬師寺（曹洞宗、山岡町原札之辻）」が現存するが、同寺は、寛永3年［1626］開基の龍雲山普門寺（曹洞宗、山岡町下手向荒木）の末寺ということであり、「窪原山薬師寺」とは別と考えられる。

次に「窪原山」という山号から考えると、現在、山岡町久保原岩ヶ洞に存する医王山林昌寺（曹洞宗）が、候補になりそうである。ちなみに、山岡町は、表2のような地域合併に伴う歴史を経験している。

表2：山岡町合併史年表

明治30年［1897］	馬場山田村、久保原村、上手向村が遠山村に、下手向村、釜屋村、原村、田代村が鶴岡村にそれぞれ合併。
昭和30年［1955］3月1日	遠山村と鶴岡村の合併により山岡町となる。
平成16年［2004］10月25日	恵那市と合併し、恵那市山岡町。

表2に明らかなように、かつては「久保原村」が存しており、この地名は、鎌倉期には「窪原」で現れるという[11]。明治30年に合併してできた「遠山村」は「遠山庄」にちなんだ地名と思われる

[9] 山本英二氏のご教示。

[10] 平成16年［2004］10月25日、全ての町村が岐阜県恵那市と合併しているが、以下の記述はこの合併前時点の地名に従っている。

が、遠山庄は鎌倉時代以降遠山氏の所領で、恵那郡のみならず木曽の地に及んでいる。

ところで、現在の林昌寺に伝わる『醫王山林昌寺由来記』（享保9年［1724］奥書）や、『恵那郡史』所引の『久保原役元代々記録』（文化6年［1809］）[12] 等によれば、林昌寺開山以前の歴史は表3のようであったという。

表3：林昌寺開山前小史年表

文保年間［1317—1318］	丹波の草伯という僧が、行基作の薬師如来を奉じて、当地へ。
元徳年間［1329—1331］	七堂伽藍を有する医王山瑠璃光寺（天台宗）建立。
天文年間［1532—1554］	戦火にて全焼廃絶。
寛永2年［1625］	医王山林昌寺開山。

地名や、薬師如来を本尊としていることなどから考えると、この医王山瑠璃光寺が「窪原山薬師寺」に比定されるようにも思える。記録が語るように全焼廃寺によって跡形もなく消え失せてしまったのであろうが、「七堂伽藍」を有するほどの寺院であれば、それなりの什物・書籍類も存していたと推察される。

「医王山瑠璃光寺」と「窪原山薬師寺」とで名称の違いは如何ともしがたいが、「薬師如来」とは「薬師瑠璃光如来」の略称であり、「大医王仏」とも呼称されることは周知の通りであり、名称が意味するところは同じである。そこで、例えば「窪原山」は山号ではなく、純然たる地名・山名ではないのか、「薬師寺」とは固有寺院名ではなく「薬師如来を本尊としている寺院」といったほどの一般称ではないのか、又は中世の記録類が乏しいことからして、「窪原山薬師寺」が本来の名称で、後世になって、医王山林昌寺の山号をそのまま用い、薬師瑠璃光如来を本尊とするという記憶の伝承を背景に、新たな寺院名として「医王山瑠璃光寺」という名称を与えられたのではないか、などと考えてはみるものの、これだけの材料では、失われた関連中世史料を代替するまでには到らない。後考に俟ちたい。

5　重誉音義諸本中の定勝寺本の位置

次に、定勝寺本の、現在知られている重誉音義諸本中で有する価値を考えてみよう。但し、本稿では、形態書誌的レベルの考察にとどめる。

5.1　重誉音義諸本の形態特徴

表4に、これまでに知られている重誉音義諸本の書誌データを示す。

表4に明らかなように、これまで報告のあるテクストは、粘葉装・袋綴装が圧倒的に多い。重誉音義はかなり流布したと思われるので、今後の調査によって更に多くのテクストが出現する可能性は低くないが、現在知られているところでは、折本仕立のものは、この定勝寺本のみである。

[11] 古く、鎌倉期の古文書「景房知行安堵状」に見えるという（『恵那郡志』p.102）。

[12] 『恵那郡史』「終篇・第二章「伝説」の「爪切地蔵」の項（p.750）

表4：重誉音義諸本の書誌データ

書写時期	諸本名	残存状況	装丁	紙	判型（cm）	情報源
鎌倉期						
鎌倉初期	無窮会神習文庫本（井上頼国氏旧蔵）	1帖	粘葉	楮混斐	縦26.3×横13.3	岡井（遺稿）、築島（1960）、築島（1977）
弘安9年［1286］	薬師寺本（甲類）	30軸	巻子	斐混楮	縦27.7	築島（1960）
弘安9年［1286］	天理図書館本（堀田次郎氏旧蔵。宝玲文庫旧蔵）	3帖	粘葉	斐	縦27.3×横16.6	築島（1960）、築島（1977）
室町期						
室町初期	大東急記念文庫本（久原文庫旧蔵）	1帖	粘葉		縦28.7×横20.5	築島（1960）
南北朝頃	福田襄之介氏蔵本（岡井慎吾氏旧蔵。願成寺（熊本県人吉）旧蔵。）	上巻1帖、下巻断簡1葉	粘葉	楮	縦39×横20	岡井（遺稿）
南北朝頃	京都大学図書館本（経字引）	1帖	粘葉		縦25.3×横19.5	築島（1960）
南北朝頃	薬師寺本（丁）	1軸	巻子	楮	縦27.7	築島（1977）
南北朝頃	薬師寺本（丙）	1軸	巻子	楮	縦29.0	築島（1977）
室町時代	真福寺本	2帖（上下）	袋綴		縦27.7×横20.8	築島（1960）
中期頃	六地蔵寺本	中巻1帖	袋綴	楮	縦25.9×横19.7	築島（1985）
永享4年［1432］	薬師寺本（乙）	35軸	巻子	斐混楮	縦27.7	築島（1977）
明和4年［1495］～5年［1496］	**定勝寺本**	5帖	折本	楮	縦26.0×横10.5	
中～末期頃	仏乗院本（大津市坂本）	上巻1帖	袋綴			築島（1960）

5.2　定勝寺蔵大般若経との関係

定勝寺には、現在、若干の欠巻・補写巻はあるものの、大般若経（六百巻）ほぼ全巻が版経折本で存在している。印記はないが、少なくとも室町期以前のものと思われる。

その理由の一つとして、直題簽の筆が音義書写者の「祖正」と同一と判断されることが挙げられ

る（図４参照）。

この大般若経の判型には、縦26.0cm×横9.0cmのもの、縦26.0cm×横11.0cmのものなどが混在しているが、音義の判型（縦26.0×横10.5、図２参照）もこの大般若経の判型に合わせて作られたものと推定される。

表４に明らかな通り、これまで、折本仕立の重誉音義は知られておらず、ほとんどが粘葉装・袋綴装であり、装丁としては珍しいものである。音義の装丁史が大局的にでも「巻子装→粘葉装→袋綴装→折本装」と描けるのかどうかは、現在の研究段階では不明であるが[13]、そういった流れがあったとしても、定勝寺蔵の大般若経と大般若経音義との間には、判型の類似、直題簽書写者と音義書写者とが同一、という享受レベルにおける共通点が見られることから見て、この定勝寺本重誉音義は、この定勝寺蔵の大般若経に併せて、その判型・装丁まで合わせて作成されたと考えられ、両者を関連付ける意識がその判型の類似にまで及んだと見てよいと思われる。

6　まとめ

最後に、本稿で述べた内で、定勝寺本大般若経音義の特徴・価値と考えられるべき点を箇条で示すことで、まとめとしたい。

1．定勝寺本大般若経音義は中世に流布した重誉音義の一本であり、新出資料である。
2．書写年代は明応４～５年と明確であり、全文一筆書写。
3．装丁は折本仕立であり、これまでに紹介されている重誉音義諸本にはない装丁である。
4．装丁や書写者の点から、定勝寺蔵の大般若経（刷経）との間に享受レベルで関連が考えられる。

音義の内容に関しては、稿を改めたい。

参考文献（研究書・研究論文関係）

1．岡井慎吾（遺稿）大般若経音義（福田（1959）に附載）
2．築島　裕（1959）故岡井慎吾博士蔵大般若経音義管見（福田（1959）に附載）
3．築島　裕（1960）大般若経音義諸本小考　『東京大学教養部人文科学科紀要（国文学・漢文学）』４
4．築島　裕（1977ａ）『大般若経音義の研究・本文篇』勉誠社
5．築島　裕（1977ｂ）無窮会本系大般若経音義附載の篇立音義について『国語学と国語史（松村明教授還暦記念）』明治書院
6．築島　裕（1985）解題（大般若経音義巻中）『六地蔵寺善本叢刊・第六巻　中世国語資料』汲古書院
7．福田襄之介（1959）家蔵本大般若経音義について　『岡山大学法文学部学術紀要』11
8．水谷眞成（1949）仏典音義書目　『中国語史研究―中国語学とインド学との接点―』三省堂（1994）所収

[13] 書物のジャンルを超えた装丁史一般として、巻子装→折本装→粘葉装という流れが説かれるが、これが日本に於いてもそういえるのかどうかについては疑問なしとしない。少なくともこと音義書に限っていえば、粘葉装の前に折本装が存在した可能性は低いように思われる。音義書に限らず、各種調査報告などを見ても、寺院の平安期の聖教類には粘葉装が多いようである（cf.山本（2004：58-59））。

9．山本信吉（2004）『古典籍が語る―書物の文化史―』八木書店

参考文献（史料関係）

1．恵那郡教育会編（1926）『恵那郡史』（1969復刻、大衆書房）
2．「かみむら」編纂委員会（1963）『かみむら』上矢作町
3．斎藤昭俊・成瀬良徳編著（1993）『日本仏教人名辞典』新人物往来社
4．浄戒山定勝禅寺（1998）『本堂建立四百年記念資料』浄戒山定勝禅寺
5．真言宗全書刊行会（1934）『真言宗全書・第三十六（小野類秘鈔・鵝珠鈔・學源抄）』（2004復刊、高野山大学出版部）
6．日本仏教人名辞典編纂委員会編（1992）『日本仏教人名辞典』法蔵館
7．本田喜代治・松井武敏監修（1960）『明智町誌』明智町
8．松井武敏・安藤慶一郎監修（1968）『串原村誌』串原村
9．山岡町史編纂委員会（1977）『山岡町史・文化財図録編』山岡町

謝 辞

本稿を成すに当たっては多くの方々のお世話になった。

先ず、この貴重な文献について、定勝寺住職松葉文弘氏の特別のご高配により、何度となく親しく調査する機会を与えられ、檀家総代の川合仁志氏には調査全般に渡って終始便宜を図って頂いた。そもそも本文献の存在については、数年来定勝寺文書の調査に携わっている山本英二氏（信州大学人文学部）より教示を受け、調査する機会に恵まれた。また同じく数年来定勝寺文書の調査に携わっている鈴木俊幸氏（中央大学文学部）、多くの中世寺院聖教の調査を手掛けている渡邉匡一氏（信州大学人文学部）にも様々な教示を得た。定勝寺本の書写底本があったという「窪原山薬師寺」の比定調査過程で、医王山林昌寺住職宮地祥敬氏には、同寺の歴史についてご教示頂いた上に、同寺に伝わる貴重な写本『醫王山林昌寺由来記』の閲覧・複写の便宜を賜り、大東急記念文庫本大般若経音義の書誌情報確認については、同文庫の村木氏のお手を煩わせた。以上の方々に記して謝意を表す。

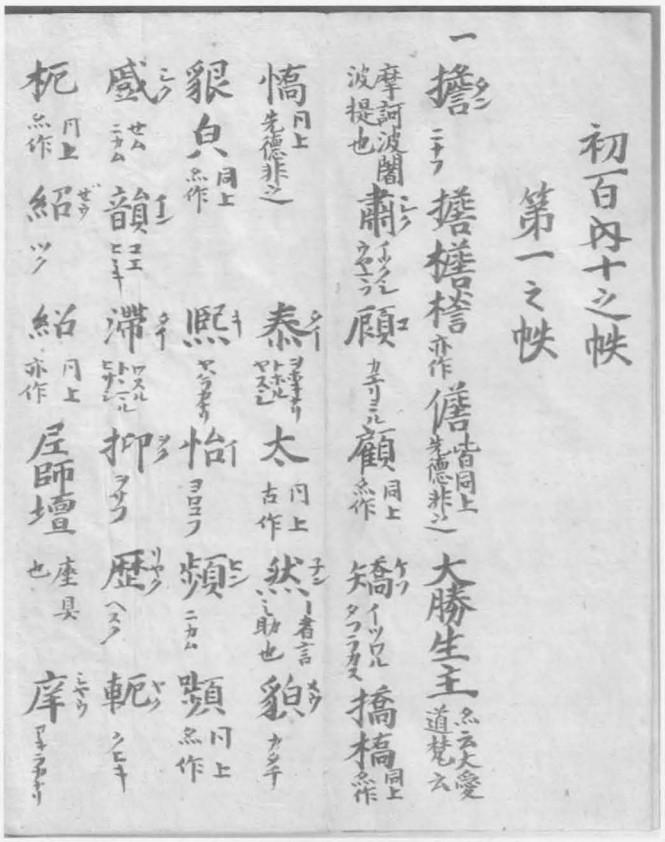

図１：第一帖冒頭部

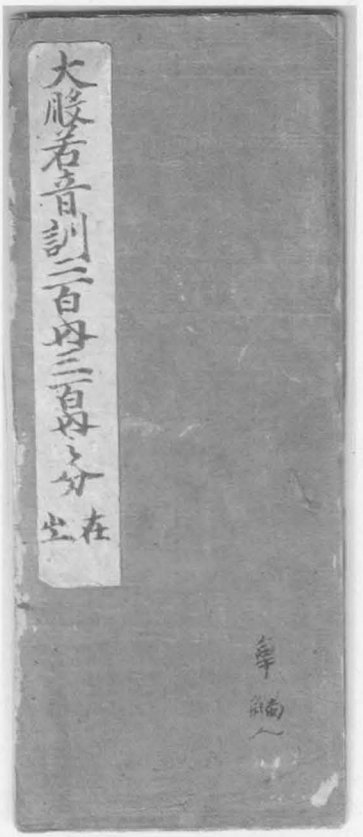

図２：第二帖（表紙）

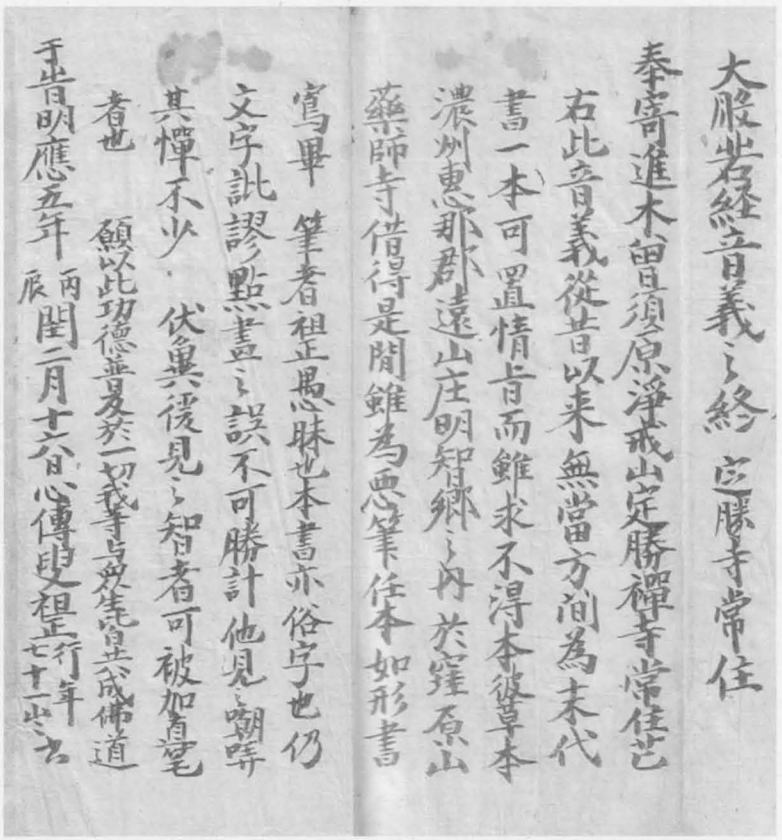

図３：第五帖奥書

図４